

唐門（国宝）

唐門は、東照宮の拝殿と聖域の前に建っている。白い色素と複雑な彫刻が施された中国風の門は、徳川幕府の力強さと富を象徴している。幕府や天皇の宮廷の要人が特別な時にのみ使用していた。

湾曲した切妻（唐破風）は建物の威信や権威を示すもので、この門は四方を湾曲させている。楣の上の彫刻には、高潔な人柄で有名な中国の伝説的な皇帝、俊との謁見が描かれている。正面の切妻の下彫刻と、側面のまぐさの上の彫刻には、中国の神話上の賢者が描かれている。

また、天に昇る龍と、前柱に戻る龍も描かれている。柱の白い顔料（胡粉）は貝殻を砕いて作られたもので、1600年代に建てられた当時は珍しく高価なものであった。

護摩堂（重要文化財）

元々は天台宗などの密教と関係の深い護摩焚きの儀式に使われていたお堂である。しかし、1868年の一連の神仏分離令により、東照宮から仏具や仏像が撤去されると、社殿となった。人々はこの護摩堂で、家族の健康や旅行中の安全など、さまざまな加護や守護を祈願する。かつてここに祀られていた五智王と十二神将の像は、現在は輪王寺の大護摩堂に安置されている。

眠り猫

東照宮の内宮に通じる東回廊の上に眠る小さな猫の寝姿は、日光のシンボルとしてよく知られている。これは、1600年代初頭に活躍したとされる両手利きの大工、左甚五郎の作と伝えられている。